

人生の意味は誰が決める 哲学者 森岡正博

2024/1/18付 | 日本経済新聞 夕刊

自分の人生に意味があるかどうかは、その人生を生きている本人が決めればよいことだろうか。それとも、誰の目から見ても意味のない人生というものがあるのだろうか。これは悩ましい問題である。

日本で問いかけると、多くの人たちは次のように答える。「自分の人生に意味があるかどうかを決めるのはその本人なのであって、他人からとやかく言われる筋合いのものではないのだ」と。

だが、現代の哲学者のあいだでは、そのように考えない人のほうが多いと言えるだろう。スーザン・ウルフは、1日中マリファナを吸うことや、クロスワードパズルを延々とやることは、その人の人生に意味を与えないと強調する。いくら本人が好きでやっているとしても、客観的に見てそれらの行為には価値がないのだから、人生における意味もまた存在しないというのだ。

これはつぎのような問いへとつながっていくだろう。「この世にはまったく意味のない人生というものがあるのだ。たとえば、ヒトラーや、オウム真理教の教祖の麻原は、この世に悪しかもたらさなかったから、その人生はまったく無意味なのだ。あなたは、もし仮に麻原が自分の人生には大きな意味があったと言ったとしたら、それを認めるのですか？」

みなさんはこの問いかけにどう答えるであろうか。「彼らの人生にも意味はあった」と胸を張って言えるだろうか。もし言えないとすれば、あなたは、「誰の目から見ても意味のない人生」というものがこの世にあるのだと、心のどこかで認めてしまっているのではないか。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

NIKKEI Nikkei Inc. No reproduction without permission.

小さな石の意味 哲学者 森岡正博

2024/1/25付 | 日本経済新聞 夕刊

前回は、「誰の目から見ても意味のない人生」について考えたが、それでは逆に「誰の目から見ても意味のある人生」というものは存在するのだろうか。哲学者スーザン・ウルフは、そのような人生は存在すると主張する。それは、ガンディー、マザー・テレサ、アインシュタイン、セザンヌのような人生である。

哲学者サディアス・メッツもまた、これに賛同する。それらの偉人たちは、人類に高貴な精神性をもたらし、たぐい稀（まれ）な科学の達成や、高度な芸術をもたらした。このように、人類全体の真善美を高めるために、自分の理性をうまく使いこなそうとすればするほど、その人の人生はより有意義なものになるとメッツは言うのである。

頷（うなず）ける面はあるのだが、そこまで言われてしまうと、じゃあ我々のような平凡な人間の人生にはたいした意味はないのかと尋ねてみたくなる。

フェデリコ・フェリーニの名作映画『道』に、こんなシーンがある。女性芸人のジェルソミーナは、なにをやらせてもダメで、自己嫌悪に陥っている。それを知った綱渡りの男が、足元の小さな石をひとつ拾って彼女に言う。「こんな小石であっても何かの目的があるはずだ。もしこの小石が無意味であったとしたら、すべては無意味だ。あの星々も。……お前だって、何かの目的が具（そな）わっているはずだ」

この言葉には、ウルフやメッツのような哲学者が語ることでできていない、大いなる真理が存在している。そこへともう一度光を当て直していくことが、いま必要なのではないか。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

NIKKEI Nikkei Inc. No reproduction without permission.